

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K03086

研究課題名(和文) がん患者家族における複雑性悲嘆のリスクアセスメント：死別前後の比較検討

研究課題名(英文) Risk assessment of complicated grief in families of cancer patients: A comparative study before and after bereavement

研究代表者

佐竹 宣明 (Satake, Noriaki)

東北大学・医学系研究科・非常勤講師

研究者番号：20723208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：2019年10月から実際の外来家族教室を施行した。家族教室参加に同意された方々は、全員が東北大学病院緩和ケア病棟への入棟目的に紹介された患者の配偶者や子供であった。患者家族の有する悩みや辛さを聞き取りながら、家族が現在感じている不安や気持ちの辛さについて傾聴しつつ、解決につながるアドバイスを行った。医師や臨床心理士が専門性を生かし、資料として用意した看取りのパンフレットを用いながら家族の個別の質問に答えることを通して不安の軽減に努めた。家族教室終了時には個々の家族からは気になっていたことが質問できよかった、不安な気持ちが軽くなった等の評価をいただいた。質問紙をお渡しし郵送にて回収をした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

がん患者家族との対面とその後の調査紙票の解析を主体としたものであり、新型コロナパンデミックの数年間にわたる流行と時期的に重なることで解析可能な予定数に達する前に研究の停滞を余儀なくされたことは極めて残念な結果であった。しかしながら、パンデミック中に一般的となったWEBを利用した遠隔診療は緩和医療の患者診療のみならず家族ケアの部分においても有用と思われる、新たな研究を通して社会貢献を成し遂げていきたい。

研究成果の概要(英文)：Actual outpatient family classes were held from October 2019. All those who agreed to participate in the classes were spouses or children of patients who had been referred to the palliative care ward at Tohoku University Hospital. While listening to the worries and distress of the patient's family, we listened carefully to the anxiety and distress the family was currently feeling, and offered advice that would lead to a solution. Doctors and clinical psychologists used their expertise to answer individual questions from family members using a pamphlet on end-of-life care that had been prepared as a resource, and tried to reduce their anxiety. At the end of the classes, each family member commented that they were glad they had been able to ask questions that had been bothering them, and that their feelings of anxiety had been alleviated. Questionnaires were handed out and collected by mail.

研究分野：緩和医療

キーワード：がん患者家族教室 がん患者家族の悲嘆 レジリエンス

1. 研究開始当初の背景
 がんの治癒が難しく、患者はもろがて中において、緩和ケアが重要な役割を果たしている。しかし、がんの進行に伴って、患者の身体的苦痛や精神的苦痛が増え、生活の質が低下する。このような状況下では、患者の家族に対する支援が非常に重要となる。本研究は、がん患者の家族に対して死別前後の心理的課題を包括的にアセスメントし、それを支援に役立つ介入を効果的に提供することを目指す。また、緩和ケア医師、精神科医師、臨床心理師等が連携して対応を行うことで、不安等の精神的課題の軽減を図ることが期待された。

2. 研究の目的
 本研究は、がん患者の家族に対して死別前後の心理的課題を包括的にアセスメントし、それを支援に役立つ介入を効果的に提供することを目指す。また、緩和ケア医師、精神科医師、臨床心理師等が連携して対応を行うことで、不安等の精神的課題の軽減を図ることが期待された。

3. 研究の方法
 東北大学病院緩和ケア外来を受診したがん患者の家族を対象とし、対面または電話によるアセスメントを実施した。対象者には、死別前後の心理的課題や精神的苦痛の有無、生活の質の低下、経済的負担、社会的孤立感などについて聞き取りを行った。調査期間は2019年7月23日から2020年1月までであり、約60名の家族が参加した。本研究の趣旨を説明し、同意を得た後、調査票への記入を依頼した。

4. 研究成果
 2019年7月23日付で東北大学医学系研究科の倫理審査等を経て、本研究の目的、方法、期待される効果等について説明し、参加者の同意を得た。調査期間は2019年7月23日から2020年1月までであり、約60名の家族が参加した。本研究の趣旨を説明し、同意を得た後、調査票への記入を依頼した。調査結果として、死別前後の心理的課題や精神的苦痛の有無、生活の質の低下、経済的負担、社会的孤立感などについて聞き取りを行った。調査期間は2019年7月23日から2020年1月までであり、約60名の家族が参加した。本研究の趣旨を説明し、同意を得た後、調査票への記入を依頼した。

可されない状況となった。本研究の共同研究者や研究助手ともは定期や
的に対面やWEBでの情報交換を継続していたが、学術集会所も延期や
WEB開催となり、多研究者との交流や知見の収集は制限され、本研究期
自体は停滞を余儀なくされた。パンデミックの終息に期待し、研究な
間延長を行っていたが、残念ながら研究終了を迎えざるを得な
った。
以上の経過で、本研究の成果としては家族教室の施行に よるがん患
者の家族ケアの部分的なものにとどまらざるを得なかつたものの、
未曾有のパンデミックの経験から医療における対面でのケアや
についてWEB等ICT利用の安全性や持続可能性の着目でき、今後
の新たな緩和医療の研究に生かしていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	内田 知宏 (Uchida Tomohiro) (30626875)	尚綱学院大学・総合人間科学系・准教授 (31311)	
研究分担者	齋藤 秀光 (Sito Hidemistu) (40215554)	東北大学・医学系研究科・名誉教授 (11301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関